

ツとドアをたたき、“先生なにか面白いことはありませんか”と彼が私の部屋に入ってくるような気がしてならない。タロちゃんよ、安らかに眠り給え。

浅野 太郎 さんの こと

神奈川大・工・物理 大 成 逸 夫

八月も終りの或る暑い日、電話で「今カライッテキマス、ヨロシク」とのみ拙宅に伝言を残されて、浅野さんはプリンストンへ出達されました。普段と変らぬやゝ甲高い声の早口でしゃべられたそうですが、道で擦れ違った時の如くに簡潔な挨拶には、いつものことながらに感心させられました。単刀直入で修飾語を除いた表現法、それは浅野さんの特徴の一でありましょう。

いつの事でしたか、大学院生が集って強磁性の何かについて議論をしていた折に、浅野さんがフラリと入ってこられたので、質問をしましたところ、「磁石力！ ヨク判ラン」と言われただけでした。大学院の初学年の人達に較べれば、遙かに造詣が深くていらっしゃるにもかかわらず、決して思はせ振りをなさりません。もしその時、人々がするように、“誰その理論はこうで、結果はかくかくしかじか”，という具合に説明して下されば、居合わせた大学院生を満足させるには充分でありましたでしょう。しかし、今にして思いますと、「判ラン」の一語の持つ意味の方が随分と重く感ぜられます。

駒場の物性コロキウムでは、当然の事ながら、所謂多体問題的な物性論の話が多くあります。その中で、浅野さんの話し振りは一風変ってしまして、必ずと言って良い程、定理が強調されていたように記憶しています。（浅学な筆者には浅野さんの物理学について評する資格はありません。）手元にあるコロキウムノートを繰ってみますと、例えば、「 He^3 の比熱」について議論されたときには、Ward identity を出発点にされていますし、「Fermi 流体の基底状態」について話された際には、Virial 定理、エルゴード定理、そして $1/k^2$ 定理を用いてその安定性を論じられています。亦、「相転移の理論」を展開された折には、Landau 流の order parameter は、compact な Lie 群であればそれを常に選択できること、を中心的な主題として、Goldstone の定理、Hölder の不等式など、

大成逸夫

当時では馴染みの少い事柄を使って議論を進められました。一番記憶に新しいのは、周知の「Lie-Yang の定理の証明」であります。この他は良く覚えていませんが、どれを取ってみても、Hartree-Fock や R.P.A,そして decoupling や数値計算とは随分かけ離れていました。それで、浅野さんは $\sim$ や $\gtrsim$ では満足なならず $=$ や $\geq$ でないと納得されない方なのだろうという印象を禁じえませんでした。実際、浅野さんがいつも小脇に抱えておられた本には、群論や多様体、そして位相解析など数学の本が多く見受けられましたし、先輩諸氏が、exact 派とか定理派とか評していたこともありました。しかし、お茶を飲みながら雑談をしている時などには、“いわゆるドロクサイ研究をしなければダメだ”と漏らされた事を忘れ得ません。

浅野さんの周囲の人々は、先生も先輩も後輩も、普段は「タロチャン」と呼んでいます。それは呼び易いからだけではなく、いかにも天真爛漫な人柄に対する敬愛の念からなのでもあります。ゲーテの一説を口遊びながら恍惚として廊下を歩かれる姿、亦、一杯の酒に酔って無邪気に「シェー」のポーズをして見せられるとき、そしてまた、囲碁で敗色濃厚になると、「この一手」とばかりに碁盤をひっくり返してはにかまれるとき、など、「タロチャン」の呼び名が最も相応しく感ぜられました。

人それぞれに浅野さんを想って一年、この夏突然に凶報を受けました。そしてかくも悲痛な出迎えをしなければならなくなるとは。

非凡な才能と天衣無縫な人格、浅野さんを失った吾々の無念さは癒えようはずがありません。ましてや、残された夫人と御母堂の悲しみは測り知れないことでありましょう。

深くふかく御冥福を祈って止みません。